

「負けず嫌いの野球人生」

喘息とてんかんを抱えた少年がプロ野球へ、そして指導者の道へ

だったんだが、3、4回お会いしているうちに「よし、やろうじゃないか」と決心した次第です。

そこで夏の県大会で仙台商業高に負けた後、前任の監督さんが退任した後の7月半ばです。ここに来て、監督に就任した。そういつた経緯ですね。3年生部員が引退し、新チームになった部員を前にしたときは、「当たり前前のことを、当たり前前に行うんじゃないか」と言った。とにかく、あらためて野球ができ環境を整え、しっかりと土台作りをしなればならない。全日制ですから単に野球だけをやって、チームが強くなればいいってことではないです。

私は頷いた。間を置き、身長181センチ、体重80キロの恵まれた体躯の野林さんは、真顔で続けて語る。

「友人や知り合いの野球関係者、もう皆さんから『ババは、もう野球から離れられないな……』と言われた。たしかに小3の9歳のときでした。初めてユニフォームを着てね。ボールとバットを握り、グラブをはめた。あれから40年以上も野球と向き合っている。ドラフトで指名されてプロになり、11年間もプレーできた。今もユニフォーム姿で指導している。

ホント、この体を見ると信じてもらえない

この9月9日で56回の誕生日を迎えた野林さんは、1969年に東京都世田谷区で生まれた。すでに述べたように体の弱い子どもだった野林さん。野球を始めたのは9歳になる小



【提供】野林大樹氏

野球を始めた少年時代の野林さん

かもしれないが、小3で野球を始める前の頃は、虚弱な子どもでね。喘息の上にテンカンをもち、朝礼では決まってぶっ倒れてしまう。プールで泳ぐなんてとんでもない。1年間も通院し、その度に脳波の検査を受けていた……。両親や2人の姉、周りの人たちにとってはやっかいな子どもだったんじゃないかな。そんな調子で人生を歩んできたほうが、野球をしてきたお陰で一人前の人間になれた。人生を振り返れば、いろいろあったね……」

インタビューは1時間以上にも及んだ。野林さんの人生は、面白くて思わず笑ってしまふこともあった。だが、その人生は才気煥発だった。

* * *

3のときだ。

「祖父が孫のぼくの将来を心配したんだろうな。丈夫な体になって欲しいと願い、リトルリーグのテストを受けさせられた。リトルに入団することになって、それからですね。野球に夢中になり、毎日3、4キロは走り込んでいた。練習する場所は、巨人軍の多摩川グラウンドで、基礎的なことを繰り返し練習する。守備位置は、ずっとショート。中学、高校時代もショートでしたね」

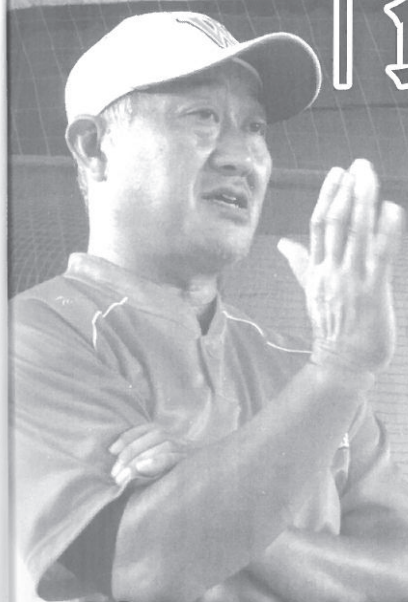
私は尋ねた。野林さんの性格を端的に言え

ば？

「ぼくの性格ですか？ まあ、ひと言で、負けず嫌い、でしょうね。とにかく、常に『前進するのみ』と考えている。小6のときの身長は158センチだったが、日大三中に入學してリトルシアで練習すると20センチほど

☆“時間厳守・準備・覚悟・責任”——野林大樹監督が語る、野球と人生の真実

「負けず嫌いの野球人生」



喘息とてんかんを抱えた少年がプロ野球へ、そして指導者の道へ

取材・文＝岡 邦行

体の弱かった少年時代を過ごしながらも野球に出会い、近鉄2位でプロ入り。広島やヤクルトでもユニフォームを着て11年間の現役生活を続けた野林大樹さん。引退後は大学や社会人、さらには海外での普及活動に携わり、今年夏から日本ウェルネス宮城高の監督として新たな挑戦を始めた。歩みの根底にあるのは、野球を通じて人を育てるという揺るがぬ信念である。

宮城県仙台市。JR仙台駅から仙石東北ライン快速に乗れば、40分ほどで陸前小野駅に着く。その駅前から徒歩で約25分。宮城県東松島市小野字裏に2020年春に開校した全日制の「日本ウェルネス宮城高等学校（学校法人タイケン学園グループ）」は位置し、総合コースとともに野球部員が在籍するスポーツコース（男女硬式野球部の他に男子サッカー部、女子バレーボール部、男女バスケットボール部）がある。学校案内のカラー刷りパンフレットのスポーツコースのページには、次のように記されていた。

「これからのスポーツの多様性から、アスリートの競技力や身体的育成はもとより、共生社会の意義を認識できるライフスキル教育を積極的に取り入れたコース。男女寮を完備しており、生活面からサポートします。」

9月初旬の終日小雨降る日だった。校舎1階の校長室の応接間。男子硬式野球部監督の野林大樹さんは、私を直視しつつ言った。

「今年3月31日に2年間ほどお世話になった上武大学（群馬）のコーチを辞めてね。もう野球界から引退しよう、そう考えていたら5月の連休明けだった。学校法人タイケン学園の副理事長からこの監督を引け受けて欲しいと。高校野球の指導者に就くのは初めて